

J100B コースプロジェクト「短篇小説」

転生して中世の田舎で幸せを見つけた～現代社会の 過労死と環境汚染を考える異世界生活～

Darren Wang 王・ダレン

Erkhembaatar Dashdorj ダーシドージ・エルケンバーター

Aaron Liem リエム・アーロン

【転生前】

マコトはまたしても深夜のオフィスで一人、パソコンの画面に向かっていた。外はすでに真っ暗。窓から見える街は薄いスモッグに覆われている。東京の空気はいつも重く排気ガスと工場の煙が混ざり合い、まるで呼吸するたびに肺が汚れていくような気がする。子供の頃に見た星空を思い出す。田舎の空は綺麗で、星が無数に輝く。あの頃は、こんなにも息苦しい世界になるとは思ってもいなかった。

「マコト、まだいるのか？」

背後から聞き慣れた声が聞こえる。佐藤だ。彼もまた、田中課長の無理な要求に応えるために残業している。佐藤の顔は疲れて、目の下にはクマが浮かぶ。

「ああ、もう少しで終わるから。佐藤は先に帰っていいよ。」

マコトは無理やり笑顔を作り、そう言った。しかし、佐藤は首を横に振り、隣の席に座った。

「一人で帰るのもなんだし、一緒に終わらせよう。それに、最近のマコト、元気ないだろ？大丈夫か？」

佐藤がそう言っても、むしろ彼の方がもっと深刻そうだった。マコトが何度残業しても、何度も遅く帰っても、佐藤もそばにいて一緒に働いていた。全く、このパワハラ
の課長…

「大丈夫だよ。ちょっと疲れてるだけ。もうすぐ終わって帰れるし。」

マコトはそう答えたが、心の中では「もう限界だ」と叫びたい気持ちでいっぱいだった。そう思った時、瞼が重くなっていた…

「いや、寝るのはダメだ。早く終わらせよう。」でも、これはいつまで耐えられるのか？明日も同じく残業になる。自然に憧れていたが、オフィスから脱出しても、この環境の美しさは毎日少しずつ消え失せていた。また、瞼が重くなっていた…

「危ない、これ…後少しだけ…」と言ったが、今回は本当の限界だった。もう、頭の中に田舎と青空と、誰かの優しい声が浮かんでいた。三回目に瞼が重くなった時、この世で再び目を開けられなかった。これから最後の美しい夢が始まった。

【転生！】

マコトが目を覚ますと、そこは知らない場所だった。天井が低く、木が剥き出しになり、部屋は温かい雰囲気にもまれていた。窓からは柔らかな光が差し、外からは鳥の声や風の音が聞こえた。

「ここは……どこだ？」

意識と記憶もはっきりしていなかった。オフィスで倒れたこと、そして意識を失う前に感じたあの無力感… ここは現代の東京ではない、それが分かった。空気が違った。澄んでいて、どこか懐かしい匂いだった。

「あ、起きたんですね！」

突然、明るい声が聞こえた。マコトがゆっくりと体を起こすと、いつからか門口に一人の少女が立っていた。彼女はプレーンなドレスを着て、金色の髪を軽く結んでいた。その顔は優しく、マコトにとって太陽のように見えた。

「私はシルビアです。この村の農家の娘です。あなたは森の中で倒れていた。それを見つけられて、ここに連れて来られました。大丈夫ですか？痛い所がありますか？」

シルビアは早口で言いながら、マコトのそばに行った。

「あ、..大丈夫です。ありがとうございます。」

マコトは答えた。彼はまだ状況を理解できていなかったが、シルビアの優しさに安心した。

「よかった。じゃあ、少し外に出てみませんか？気分が良くなると思います。」

シルビアは、マコトの手を取った。彼女の手は温かく、そして固かった——農作業をよくする手だった。

外に出ると、マコトは息を呑んだ。視野が広がって、遠くには緑の山がある。空は青くて、雲が一つもない。風が動き、草の匂いが鼻をくすぐった。彼は久しぶりに、軽い気持ちを感じた。「ここは……どこですか？」マコトは思わず尋ねた。シルビアは驚いた表情で、微笑んだ。

「ここはエルダ村です。あなたはどこから来たんですか？」

「私は……東京から来ました。」

「東京？聞いたことがないですね。でも、きっと遠いところから来たんでしょう。大変だったですよね。」

シルビアの言葉に、マコトは胸が熱くなった。その瞬間、彼は自分がもう現代の世界にいないことに気づいた。そして、この世界が彼にとっての「新しい始まり」であることを悟った。

【異世界生活の始まり】

マコトはシルビアの家に滞在することになった。彼女の家族は彼を温かく歓迎し、すぐに村の一員として受け入れてくれた。初めは慣れない農作業に戸惑いながら、シルビアや他の村人たちの助けを借りて、少しずつ生活に慣れて行った。

ある朝、マコトはシルビアと一緒に農作業に出かけた。空は晴れ、太陽が照っていた。彼は農具を手に取り、農作業を始めた。汗が落ちるが、それもまた心地よかった。東京のオフィスでパソコンに向かっていた頃とはまるで違う。この充実感。自分がこんなにも簡単に幸せを感じられることに驚いた。

「マコトさん、手伝ってくれてありがとう。疲れちゃったでしょう？」

確かに、マコトは死ぬほど疲れていたが、いつもの仕事後の感じと違った。一日中の労働は大変だったはずなのに、意外と平和だった。なぜこのようになったのだろうか？

「いや…ちょっと考えている。。ぼうっとしたんです。こんな幸せになれるとは思わなかった。」

「働いているのに？家族と全然会えない。戻れるかどうか全然わからない。大変すぎるでしょう。」

「どう説明すればいいんだろうか…帰りたくないわけではないですけど、東京では、陽光が見えずに、仕事の終わりも見えずに、毎日働く。この美しい景色の代わりに部屋の白い壁と見にくいスクリーンをずっと見る。その上、上司に怒られたり、ストレスが溜まったりして。。。ここでは解放された感じだ。」

「えっと、よく想像できないんですけど、ここで働く方がよくても、本当に大変すぎることはありませんか。」シルビアの声は親切そうに聞こえた。

「確かに大変だけど、それでも……ここには、東京にはない何かがある。空気も、景色も、人々の笑顔も。全部があって、生きているって感じがするんだ。」

「マコトさんは変わってるね。でも、悪いことじゃないよ。私にとってもこの人生は結構よくて、十分だって感じるの。贅沢はできないけど、ただただ生きている。」

彼女の言葉に、マコトは胸が温かくなった。彼はこの村での生活が、自分にとっての「本当の生き方」かもしれないと感じ始めていた。

夜になった。マコトは村人たちと一緒に食事をした。テーブルには野菜とパンがあった。そして新しい村の果物が並んでいた。みんなで囲む食事は楽しくて、笑い声が止まらなかった。マコトはそんな光景を見ながら、自分の元の生活を思い出した。あの頃は、一人でコンビニの弁当を食べることが多かった。忙しくて、誰と話す時間もなかった。ただ生きるために働いていた。「どうしたの、マコトさん？急に黙って。」シルビアが心配そうに聞いた。マコトは笑いを浮かべ、こう答えた。「いや、ただ……昔のことを思い出して。あの頃は、こんなに笑うことがなかったんだ。」

「それは寂しいね。でも、これからはここでたくさん笑いましょう！村のみんなは、マコトさんが来てくれてことを本当に本当に喜んでする。」シルビアの言葉に、マコトの頬が熱くなった。頭がぼっとした。この村での生活が、彼にとっての「新しい家族」であることを悟った。

【村長と初対面】

ある日の午後、マコトは村の広場で村長のオスカーと話をした。オスカーは白いひげをもつ老人で、村の人々から信頼されていた。彼はマコトに話をした。

「マコトさん、この村での生活には慣れましたか？」

オスカーは優しくマコトを見つめながら、そう聞いた。

「はい、少しずつですが。みなさんが親切だから、とても居心地がいいです。」

マコトがそう答えると、オスカーは頷いた。

「それはよかった。でも、時々あなたは遠くを見つめている。何か悩みがあるのかな？」

オスカーの言葉に、マコトは少し驚いた。そんな表情が出ているとは思っていなかった。しかし、オスカーは彼の心の奥にあるものを感じた。

「実は……私は以前、とても忙しい世界に住んでいました。空気は汚れ、人々はいつも急いでいて、自分のことしか考えていないような状態でした。でも、ここに来て、すべてが違うと分かりました。ここには、自然があり、人々の笑顔があり、本当に大切なものがたくさんある。」

マコトがそう言うと、オスカーは頷いた。

「なるほどね。あなたの話を聞いていると、ここと同じく苦労しているのに、その世界には幸せを見失って苦しんでいるね。」

マコトの言葉に、オスカーは少し考え込んで、ゆっくり口を開いた。

「本当の幸せは、そんなものとは違う。ここにあるように、自然と共に生きる。人々と支え合う。それが人間にとっての本来の姿なんだ。」

オスカーの言葉は、マコトの心に響いた。彼はふと、自分が現代社会で失っていたものを思い出した。時間、人間関係、そして自然とのつながり。。。それらすべてが、ここにはあった。

「オスカーさん、ありがとうございます。あなたの言葉で、私は大切なことが分かるようになった。」

マコトがそう言うと、オスカーは微笑した。

「いいんだよ、マコトさん。あなたはもうここにいる。これからは、この村で新しい人生を歩む。私たちはいつでもあなたと一緒にいる。」

その言葉にマコトは胸が熱くなった。マコトにとって村は「本当の幸せ」だった。

【結局】

マコトは村での生活に完全に慣れた。彼はシルビアや他の村人たちと共に働いて日々を過ごした。彼の心は軽くなり、笑顔も自然になった。彼はもう、あの汚れた空気を過労に苦しむ日々を思い出すことはなくなった。

ある夜、マコトは一人で村の外にある山に登った。そこからは村全体が見えて、星空が綺麗だった。彼は空を見ながら、自分がここに来てからのことを思い出した。

「あの日、オフィスで倒れた時、私はもう終わりだと思った。でも、今思えば、あれは新しい始まりだったんだ。」

彼はそう言って、胸に込み上げる感情を抑え切れなかった。この村での生活は、彼にとって「再生」だった。彼はここで、本当の自分を見つけて、本当の幸せを知った。

「マコトさん、ここにいたんだ。」

突然、シルビアの声が聞こえた。彼女はマコトの側に座り、一緒に星空を見上げた。

「うん、ちょっと考え事してたんだ。」

「何を考えてたの？」

「昔のことと、これからのこと。私はもう、あの世界に戻ることはないだろうと思ってる。ここが私の家だ。シルビアやみんながいる村が。」

シルビアは少し驚いた表情を浮かべた。でも、優しく笑った。

「それは嬉しいね。私たちも、マコトさんがここにいたことが本当に嬉しい。」

彼女の言葉に、マコトの心が暖かくなった。彼にとって「終わり」ではなく、「始まり」だった。

次の日、マコトは村人たちと共に新しい畑を作った。彼はそれをしながら、これからの未来を思い描いた。ここで、彼は新しい人生を歩む。

「これからも、この村でみんなと一緒に生きる。」

マコトは心の中でそう思って、青空の下で力強く働いた。彼の新しい人生は、ここから始まる。自然と共に、人々と共に。

参考文献

長月達平.Re:ゼロから始める異世界生活. 株式会社角川書店,, 2014.

理不尽な孫の手. 無職転生 ～異世界行ったら本気だす～. 株式会社メディアファクトリー, 2014.

新海誠. 天気の子.株式会社コミックス・ウェーブ・フィルム, 2019.

“The Dark Side of Japan’s Work Culture.” YouTube, uploaded by Asian Boss, 15 Mar. 2021.